

風雅のはし

土田龍太郎

わが住む宿近くに、かたへは人と車の行きかよふ道にそひ、またかたへはよその家居の裏に隣りて擴ごれる荒れたる草原のごときところあり。ほぼ方形なれば四隅あれども四邊みな鐵かねの柵もて限りたり。縦やや長くおほよそ十四間なれど横は十間にも足らざるべし。

もとたれ人の住るせしやらむは知るべくもあらず。古き石疊いしたみしきいしみきり敷石砌いしきりの跡の見えばこそ、今に遺れるはわづかに瓦礫かはらいしくれのたぐひのみなるぞあいなき。大いなる樹の枝を切り去りて後に残れる太く丸き幹ばかりなる二つ三つ、切株のかたはらに横ほり倒れたるさまうち見るからにそぞろむくつけき心地ぞする。

ほかはただ荒るるにまかせてところえがほにはびこりわたれる草ばかりにて、その丈高きあり低きありさまざまなれど、ことに丈高き草の鬱こもり生ひたるあたりにては、人の姿もたやすく隠れぬべければ草の林と云はむもさまで違ふまじ。ところせきまで茂りわたれる草むら、せめて葎むくろの宿とも淺茅原とも呼びたらしましかば、なかなか宮びて聞ゆる方もありなましを、させるおもむきとてはたえてなく、しどろにらうがはしきのみなるぞわびしともわびしき。

かくばかりさうさうしき草むらに、をりにつけて世の人のめづる花の咲かむこと望むべくもあらず。ここかしこ草のあはひより見ゆるはなにとやらむ朱き小さき花の目とまるあり。これ色ばかりは芥子に似たれど、まことはさるあだめきたる花のかかるところに生ふることわりあるべくもあらず。ただわびしげにつと立てるはかなき野べの花、あながちに名を尋ぬともなにかはせむ。

昔より情ある人のめできて歌に詠み詩に謳へりしをりをりの草花さまざまなれども、これらをもしよそほひなまめけるあて人にたぐへむとせば、深き茂みにたまさかに生ひいでしはかなき花の一本は、荒れたる野らに佇める鄙ひなのあやしの賤しづの女にも譬へつべからむ。いふかひもなき賤の女の形ありさま、なにのとりどころとてもあらざめれども、ただ心細げなるその姿、すなほにきすくなれば、らうたしとまでこそはさすが云ふまじけれ、いとほしきけはひのはつかにそひて見ゆることなきにしもあらず。さればゆかしき方さらになしとは云ひがたかるべし。これさへぞまた風雅の道に入るはしとならざらむも測りがたければ、ゆめゆるがせにすべからざるにこそ。

そも大宮人のめでてやまぬ春の花秋の紅葉、卯月の子規ほじとぎす神無月の時雨しぐれなどばかり風雅なるにてはあらず。風雅のはしとなるものげにさまざまにてえ數へてつくしがたし。芭蕉庵桃青、笈おひの小文こぶみの序の中にて

しかも風雅におけるもの造化に隨ひて四時を友とす。見る處花にあらずといふことなく、思ふ所月にあらずといふことなし。
と紋べて

造化に隨ひ造化に歸れとなり。

と云ひとぢめたり。また土芳赤冊子に師説を引きて、

乾坤の變は風雅の種なり。

とも記せば、今もし蕉翁の所説にしたがひて考へむとすれば、乾坤の内、造化の及ぶところ、野べのさせることなき花なりとも、それさながら、風雅ならずといふことわりあるべくもあらず。

同じ土芳、白冊子の中にては、これまた師説によれりとおぼしき一ふし左のごとくに記したり。

詩歌連俳はともに風雅なり。上三つのものには餘すところもあり。その餘すところまで俳はいたらずといふところなし。

ただうち見るになにともなき野べのあだ花、なまめき立てる女郎花には似るべくもあらねば、詩歌もて謳はむことたやすきわざならず。これまさしく詩歌の餘すところなれば、その風雅のおもむきを表さむとならば、俳諧によるほかすべなきにこそ。

やつしぬるうき身のはてや草の色
やつすともただにはあらし野べの花

(令和四年七月二十七日受附)